研修医
**野田 昇宏**

研修医の野田昇宏です。
以下の３つのことを常に忘れずにいたいです。
①楽しく：今の研修がとても充実していることを嬉々として話す先輩がいました。その時思いました。この先生は仕事が楽しくできるような工夫をしているはずだ、と。
②熱く：学生時代に空手をやっていましたが練習をだらだらやっていたら先生に申し訳がないし、何より自分自身が成長しません。気持ちの「熱さ」を常に持っていたいと思います。
③冷静に：どんなに熱い気持ちを持っていても、冷静に物事に対処できなければ空回りに終わってしまいます。自分の置かれている状況、立ち位置を冷静に把握できる気持ちも大事だと思います。
「楽しく、熱く、冷静に」３つのモットーで頑張ります！

研修医
**能城 一矢**

研修医になりました、能城一矢（東京医科歯科大学出身）です。ここでの研修を決めたきっかけは、１つには大学を出て地域の病院で研修したかったからです。将来は地域で小児科医・家庭医として働きたいので、地域密着型病院での研修がベストと考えました。
趣味はオーボエ演奏です。
大学ではお茶の水管弦楽団というオーケストラに所属していました。今後も仕事の合間に続け、患者さんたちにもぜひ聴いていただきたいと思っています。
ここには素晴らしい先生方が揃っているし、いろんな意味で鍛えられそうな環境です。ぜひともこれを活用し、地域に貢献できる医者に成長したいと思います。

診療放射線技師
**平澤 和寿**

力不足で周りの方々に迷惑をかけることになると思いますが、早く独り立ちできるように頑張ります。
わたしは剣道をやっており、中学では団体戦で全国大会を経験しました。高校までは剣道づけでしたので忍耐力はあると思います。仕事では肉体的、精神的につらいことがあると思いますが、剣道で培った精神力で乗り切りたいと思っています。
出身は長崎県です。長崎に興味がある方は気軽に話しかけて下さい。

研修医
**佐野 允哉**

こんにちは。研修医の佐野です。私は高校までを佐賀で過ごし、大学生活を鹿児島で送りました。大学卒業後三年間音楽活動をしていたのでブランクがありますが、その期間は多種多様な仕事やアルバイトに携わることができて、自分にとって大変貴重な時間になりました。
ブランクの間は医療とは無縁の生活を送っていたので正直、就職するにあたって不安な部分も多々ありますが、あたたかく迎えてくださった先輩方や職員の方々に少しでも応えられるように日々努力していきたいと思います。

笑顔のひろば「第12号」
平成22年5月20日
発　行
川崎協同病院広報委員会
川崎市川崎区桜本 2-1-5
TEL:044-299-4781(代)
FAX:044-299-4788

# NEW FACE

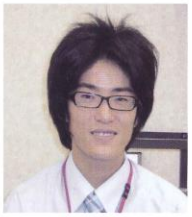
## 新　人　職　員　紹　介

北３階病棟看護師
**布川 祥司**

看護師の布川です。僕は奨学生制度を使用していたので、学生の時からこの病院にかかわる機会がありました。４月からは学生ではなく看護師として働くことが出来、色々とドキドキハラハラしています。
趣味は野球と、ネットサーフィンです。他にもスノーボード、剣道など。
僕のことを元気がありすぎると思う方もいらっしゃると思いますが、それ以上に患者様をはじめ職員の皆さまに笑顔を振りまいていけると良いなと思います。

作業療法士
**友寄 景章**

作業療法士の友寄景章です。ここでは実習で３ヶ月間お世話になりました。
新入職員研修では事業所探検や、病院周辺のことなどグループワークを通して勉強することで、病院周辺の地理や、一つの事を皆で行うので一体感が出て仲良くなることができました。
沖縄から出てきて言葉や環境の違いで毎日大変ですが、社会人としてのマナーや知識を学んでいきたいと思っています。まだまだ不安でいっぱいですが、患者さまに笑顔を届けられるように一生懸命頑張ります。



事務
**相野谷 恵一**

４月より医事課に配属されました相野谷恵一です。
病院という職場は初めてで、最初はご迷惑をおかけすることもあると思います。
ですが、前向きにがんばって、来てくださった患者さんに「またここに来たい」と思われる対応・接客を心がけて行きたいと思います。
そのためにも、他の職種の人たちに顔を覚えていただき、コミュニケーションが取れたらなと思います。

西５階病棟看護師
**牧山 彩**

看護部に入職しました牧山彩です。出身は長崎で川崎に来て今年で４年目になります。３年間、奨学生としてお世話になってきたこの病院で働けることがすごく嬉しいです。
趣味はショッピングとサッカー観戦です。今年はワールドカップの年なのですっごく楽しみです。社会人・看護師としてスタートを切ったばかりで不安や緊張もいっぱいありますが、私らしく成長できたらいいなと思います。

# 回復期リハビリ病棟の紹介

川崎協同病院では平成十九年九月回復期リハビリ病棟（計四〇床）を開設しました。回復期リハビリ病棟とは、一定の急性疾患発症後、急性期治療を終了して病状が安定しても、残存機能障害のために在宅生活に支障が見込まれる方を対象とし、リハビリに専念いただき、より安定した状態で家庭復帰されるのを支援することを目的とした病棟です（医療費が包括されるため、様々な医療行為を要する方は対象になりにくい側面はあります）。

対象疾患は術後を含む脳血管障害や脊椎・下肢・骨盤等の骨折（および術後）などで、肺炎や心不全などの内科疾患後や外科手術後の廃用症候群の方も含まれます。要件発生（疾患発症または手術）後三〇日または六〇日以内に入棟いただく必要があり、在棟期間も病名により六〇日から一八〇日と制限されています（詳しくは担当者にお尋ね下さい）。

当院では医師、看護師、ケアワーカー、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、医療相談員、栄養士、薬剤師が役割に応じて集団的に関わっています。定期的活動として、リハビリの進行状況を確認する「リハビリ回診」、病棟生活全般を相談する「病棟カンファレンス」、残存機能障害を見込んでゴール設定する「リハビリ評価会議」を通じて、スタッフ同士で情報交換をします。また退院に向けては、ご自宅の環境を確認させていただく「家屋評価」、介護保険のケアマネージャーを始め退院後に関わっていただく外部の担当者を交えた「担当者会議」も随時行い、ご家族や関係者との情報交換にも力をいれています。

これまで五〇〇名以上の方にご利用いただき、多くの方が元気に自宅退院されました。それぞれ疾患以外にも様々な背景を抱えておられ、調整に難渋したこともありますが、関係者で繰り返し話し合いをして、安全、安心な着地を目指してきました。重い機能障害で入棟された方が、元気にご自宅に帰られた時は本当にやりがいを感じ、また勇気をいただいています。

回復期リハビリ病棟の運営・維持には、地域の皆様方との連携は欠かせません。川崎市内にとどまらず、横浜市や東京都南部からもご紹介いただき、深く感謝しております。平成二十年四月に発足した「神奈川東部脳卒中連携の会」を通じた脳血管障害の方も一〇〇名近くに上っております。二〇一〇年四月より三六五日リハビリを行っており、現在、大腿骨頚部骨折の方を対象とした地域連携も準備中です。

回復期リハビリ病棟専任医
**荒木 重夫**

1月18日からは病棟見学開始。初日に協同病院の医療方針や周辺地域の特徴などをレクチャーし、その後それぞれ小児科、産婦人科の見学をおこないました。まずは日本の「地域の病院」の役割を知ることを最初の目標にして見学を行いました。また、将来のイラクの医療再建に役立つような知識・技術の基礎を身につけてもらう、検査に頼らずに症状と診察所見だけから診療していく医療スタンスも学んでもらいました。当院だけでは学びきれない高度先進医療については近隣の大学病院などにご協力をいただきながら見学させてもらいました。先進医療に触れられたことには非常に感激した様子の医師たちでした。

来日中には新聞や雑誌、テレビなどの取材依頼も多くありました。夕方のニュースで彼らの様子が放送された直後には、町を歩いていたら「テレビで見たよ」と声をかけられたそうで、「ムービースターになった気分だったよ」とアンマール医師が笑いながら話してくれました。

3月12日には子どもたちの「卒園式」と院内での「さよならパーティー」。約2ヶ月の間、慣れない英語でのコミュニケーションに四苦八苦した職員も大勢参加し、笑いあり涙ありの素敵なパーティーになりました。そして4月13日には帰国の途につきました。

当院の小児科、産婦人科は日本生協連の家庭医療プログラムの研修医も受け入れており、高い評価をいただいていることもあり、きっとイラク医師夫妻も満足して帰国されたことと思います。またわれわれも、イラクの現状、医療状況などのお話をきき、平和の大切さについてあらためて考えさせられた次第です。

副院長　安西 光洋

シェイマ医師と修了証授与

# 四月より三六五日稼働 進化する回復期リハ病棟

回復期リハビリテーション病棟は三年目を迎え、今まで以上に充実したリハビリテーション（以下リハビリ）を提供できるように取り組みを始めています。二〇一〇年四月より回復期リハビリテーション病棟の評価基準として、三六五日診療していること（日祭日もリハビリを提供していること）と入棟している全患者さんに対して毎日、一日に二時間以上のリハビリを提供していることの二つの新たな基準が加わりました。それ以外に患者さんの生活自立度（患者さんご自身がどの位身の回りのことができるかの具合）や在宅復帰率（どの位の割合の患者さんが退院後自宅で生活しているか）などの基準も満たす必要があります。法的な基準を満たすことはもちろんですが、リハビリの量と質が求められていることも事実です。

四月より、三六五日のリハビリの提供を開始しました。平日にお見舞いにおみえになれないご家族の方が、日曜日にリハビリ室に見学にみえることもあり、患者さんの意欲にもつながっていると感じます。

退院後八〇パーセント以上の方がご自宅に帰っていらっしゃいます。往診や訪問看護、介護保険のケアマネージャー、ヘルパーステーション、地域包括支援センター、補装具や車いすの専門業者、福祉用具や住宅改修の業者等々、様々な方々と連携し、在宅復帰にむけて支援させて頂いております。心身機能に重度の障がいをもって入棟されてきた方々が、元気な姿で自宅に、また、社会に復帰されていく姿を見ることがとてもうれしく、多くの勇気と元気をもらっています。

神奈川県東部地区の連携の会に参加し、近隣の病院との地域連携に取り組んでいます。最近は、神奈川県内にとどまらず、東京都の病院からの患者さんの紹介も多くなってきました。「川崎協同病院の回復期リハビリテーション病棟はいいよ。あそこのリハビリはいいよ。」と言われるように、日々邁進したいと思います。

リハビリテーション科は理学療法士（PT）十八名、作業療法士（OT）十五名、言語聴覚士（ST）二名、リハビリ助手五名のスタッフが所属しています。多くのスタッフが二〇代と若く技術的には未熟な部分も多いですが、向学心を持った若さと活気が職場のパワーの源にもなっています。今後も患者さんから学び、地域から学び、また他職種の方々から学び、成長し合える集団となっていきたいと思います。

リハビリテーション科
科長　村越　妙美

## イラク人医師が、川崎協同病院を医療見学

# 先進医療に触れ、イラクの医療再建を…

平成22年1月14日から3月12日までイラク人夫妻の医師が、川崎協同病院で医療見学をおこないました。医療見学とは聞き慣れない言葉でしょうが、日本の医師免許がないので、法律で許されている範囲で、日本の医療を学んだということです。イラクは現在でも情勢が不安定な状況にあります。そんななか、夫妻は今回、日本の医療現場で学んだことをできるだけ多くイラクに持ち帰りたいと意気込んで来日しました。

アンマール医師と
アブドゥルラフマンくん

夫は小児科医のアンマール医師。妻は産婦人科医のシェイマ医師。幼い2人の子どもを連れての来日です。アブドゥルラフマンくん2歳とアハマドくん1歳。2人は、病院の隣、こどもクリニックの2階にある院内保育園に入園しました。受け入れる保育園の先生方も言葉が通じないことや宗教上食事の制限もあることなどから、戸惑いながらの受け入れスタートとなりましたが、さすがは子どもたち、言葉の壁も簡単に乗り越えてあっという間にイラク・日本の子ども同士仲良くなり、2人は保育園が大好きになったようでした。

1月14日来日早々に病院来訪、施設見学を行いました。ひどく荒廃した医療状況下にあるイラクから来たこともあり、医療機器が充実していることや、すべてのベッドにきちんと真っ白なシーツが敷かれていることにすら驚きをもっていました。

上：ラマディ母子病院
左：イラクの病院で
実際に使っている機材

来日して5日目には私たち職員やボランティアさんを対象に、イラクで勤務しているラマディ母子病院に関する報告会を開きました。先天性異常児が生まれる率の高さ、新生児死亡率の高さなど、日本では考えられない数字が続き、聞いている職員一同大きな衝撃を受けました。

# INFORMATION

## 2009年度新人症例および活動報告発表会　開催

2010年4月5日と9日の2日間に渡り、川崎協同病院7階にて「2009年度新人症例および活動報告発表会」を開催しました。

この発表会は協同病院教育委員会主催で昨年度よりスタートし今年で2回目となります。今まで他職種共通の場で入職一年後の到達点を振り返り、評価する場がなかったことから、一年の節目に教育委員会で取り組んでみようと開催に至りました。

発表テーマは「一年を通して自分自身が学び取り組んだ業務や症例についてのまとめと課題」です。発表目的は「一年間の自己の再確認・再評価」「職責・他部署から評価を受ける」「他職種との交流」「発表スキルの向上」「今年の新入職員に自己の一年後の姿や到達点を描いてもらう」等々です。発表会は両日とも集合研修を終えて参加した新入職員をはじめ80名をこえる参加者の中、09年度入職者が多くの症例報告はじめ、ハットヒヤリ対策、インフルエンザウィルス検査、自己振返りなど一年間の中で取り組みまとめた集大成を発表しました。

会場では活発な質疑応答が行われ、多くの新入職員から「来年は自分も発表すると思うと不安だが、多くの患者さんと接することで一歩ずつ成長し一年後に発表できるよう頑張りたい」との感想が出されました。

また「他職種の業務内容・視点・アプローチが事例を通して伝わってきてとても新鮮だった、他職種の発表を聞くことが良い経験となり視野が広がった」「新人症例から学ぶ→患者さんから学ぶという視点に戻れた」「他職種の発表を聞くことでチーム医療の必要性を実感した」等の意見も出され貴重な発表会となりました。主催者側は少人数での準備にギリギリ当日を迎えましたが、無事終了できたのは発表者はじめ職責者や職場のみなさんの協力があったからこそだと感謝するとともにこの場をかりてお礼申し上げます。

今後も一年の節目を振返り確認する場、そして他職種間の交流の場としても継続していきたいと思います。

教育委員会　事務　山中 小夜子

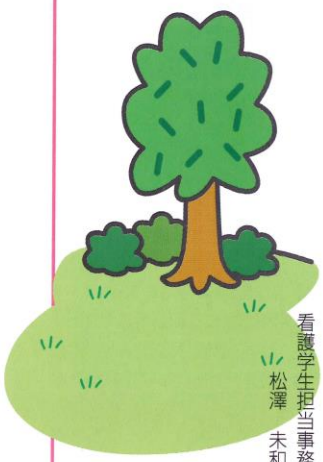
## 編集後記

いよいよ新年度が始まりました！

病院内でも三〇名の新入職員が元気に働きだして、私たちに新しい風を吹き込んでくれています。これから患者さんに新人職員が対応することもあると思いますが、不慣れなところがあっても、温かく見守っていただければと思います。

四月の入職の時期は、看護学生担当の私にとって人一倍、感慨深く感じる時でもあります。なぜなら、高校生・看護学生時代から関わってきた学生たちが、大変な看護学校生活、国家試験にも合格して無事就職してきてくれたからです。ここ二～三年の学生を取り巻く状況は、経済状況の急激な悪化で本当に大変になっています。学校に進学したくても入学金や授業料が捻出できず進路を変更せざるを得ない、また就職の内定をもらった会社から内定取り消しを受けるなど、これが今の学生たちを取り巻く現状です。一人でも多くの看護師になりたい学生へ援助をしていくことが私たち看護学生担当の役割ですが、学生たちが抱えている問題の解決は、経済状況の改善無くしては始まらないと感じています。社会保障も教育も、これからを担う子供たちが自分の夢に向かって明るく進んで行けるよう、私たちも目を向けていかなければと思います。

今は学生の成長を見守ってきた親（姉）のような気持ちで、新人達が楽しそうに研修を受けている姿を見つめています。新人たちが仕事に慣れるまでは、悩み迷い考えることが多いと思いますが、これから一緒に働いていく仲間として、今後も成長を見守っていきたいと思っています。



看護学生担当事務　松澤　未和